「県民と県議会との意見交換会」　紫波町会場　の概要

〔日　時〕　令和６年12月11日（水）13：00～15：00
〔場　所〕　紫波町情報交流館大スタジオ（オガールプラザ２Ｆ）
〔テーマ〕　「県央圏域の地域資源を生かした魅力ある地域づくりについて」
〔参加者〕　（６名）
浅沼　宏一（株式会社浅沼醤油店　代表取締役）
松本　直子（りんご畑の中のカフェ「mi café」代表）
駿河　俊也（駿河農園ベジスル　代表）
天野　咲耶（紫波町図書館　館長）
工藤　睦夫（赤沢公民館　館長）
平賀　悦子（星山えほんの森保育園　園長）
〔出席議員〕（９名）
吉田敬子議員（座長）、上原康樹議員、大久保隆規議員、畠山茂議員、高橋穏至議員、はぎの幸弘議員、菅原亮太議員、村上貢一議員、小林正信議員
〔オブザーバー議員〕（２名）
臼澤勉議員、村上秀紀議員

◆　参加者自己紹介及び現在の活動状況等について

○浅沼さん

浅沼醤油店の代表取締役を務めている。家は10代目になるが、４代前の曽祖父が、今で言う６次産業の形で、自分たちのつくった豆でしょうゆをつくったらもうかるのではないかと明治末期から大正初期にかけて醸造業を創業した。当時より、東家本店のある140メートルほどの短い通りに商店が軒を連ねているが、その中にしょうゆ屋が４軒もあった。当時は全国に１万軒以上あったと言われているが、今では1000軒を切るくらいまで減少している。どんどん工業化が進み、大規模に高品質なしょうゆがつくられるようになったこと、また、需要が日本国内でも減っていることなどもあって、県内で豆から仕込んでいる所は５軒ぐらいで、盛岡市内に工場があるのは弊社だけになってしまった。

代がわりした父は、食品工場や外食チェーン店向けのしょうゆをつくる事業にシフトし、売り上げの95％は県外へ出荷する形で事業を継続してきた。しかし、私に代がわりした後は、基礎調味料をつくることができる強みを生かして、みそやしょうゆのほかに酢の醸造なども自社で行い、岩手県でとれる、地域の資源を活用した独自の商品開発を行っている。今は、林業とコラボレーションして、木を食べられるように発酵させる技術や、県内のいろいろな木から食用に使用できる香り成分を増強するという技術に関して、研究開発に力を入れている。商品開発を通じ、全国に先駆けて岩手県らしい魅力的な特産品をつくっていけるよう力添えができたらと取り組んでいる。

今年は、岩手大学より博士号の学位を取得した。また、個人的な趣味は登山でキリマンジャロにも登頂した。

○松本さん

盛岡市の黒川地区で、リンゴを中心にブルーベリーなどの果樹生産を行う専業農家をしている。リンゴ畑の中にはカフェ、それから畑でとれた果物を使ったお菓子をつくる工房も設けている。いずれも農業の一部門として運営をし、家族とスタッフ、協力者で運営している。地域で取り組んできたこととしては、リンゴ畑を会場に２年に一度ぐらいのスパンで「りんご畑deコンサート」というチャリティーコ

ンサートを開催していた。残念ながら、今は新型コロナウイルス感染症の影響で中断しており、今のところ再開のめどは立っていない。

きょうのテーマである「地域資源」について、私は「人材」が頭に浮かんだ。少子高齢化が進む中、お金にはならないが、地域のために頑張っている人はたくさんいる。消防団だったり、郷土芸能だったり、防犯隊だったり、農家組合だったり、自分の時間を割いてまで、人のため、地域のために頑張っている人たちがたくさんいるが、その人たちのことをあまりにも知らないのではないかと思う。その人たちを支えてあげられる、応援できる、そういう仕組みができればいいと思う。

もう一つ、農地も盛岡らしい景観の一つで、そこから生み出される農産物ももちろん地域資源だと思う。しかし、地球温暖化の影響と鹿の被害をもろに受けており、リンゴで言えば、当園は、ことしは例年の６割しか収穫できなかった。こういう地域が多くなっており、これは喫緊の重要課題だと思う。農家の自助努力に任せているのではもう限界で、やれることは全部やったという状況なので、ぜひともすぐにでも解決してほしい。これも強くお話ししたいと思って来たところ。

○駿河さん

滝沢市でスイカ農家をしている。親元就農で、その前は18年間サラリーマンをしていた。滝沢市はスイカの名産地なので、家業のスイカで生計を立てられればいいなということと、スイカ農家が年々減少しており、活性化できればという思いがあり就農した。そのほかにも、サツマイモやネギなどの地域資源を生かしたものづくりをしていきたいと思っている。

従業員は、家族のほかに、季節によってアルバイトを頼んでいるが、メインとしては、福祉施設に受託農業という形で、春夏秋冬、全ての季節で農作業を依頼している。冬はスイカがとれない時期だが、貯蔵していたサツマイモを県内のスーパーや卸業者、焼き芋屋などに販売している。個人でも頼まれたときに滝沢市のビックルーフで月２回程度、焼き芋を販売している。

自己ＰＲとしては、特産品開発にも力を入れており、スイカ蜜やスイカの缶詰、スイカのドライフルーツを６年ほど前からつくり始めた。最初につくったのはドライフルーツで、スイカ蜜は全国でもつくっている人は多分いないだろうと自負している。加工業者はばらばらだが、県内各地の福祉施設に協力をいただいている。

スイカは夏の風物詩で、夏のニュースでは滝沢スイカという名前が出るが、それ以外の季節にはこれといった特産品がない。滝沢というブランドをつくりたいと思って、スイカに特化した加工品をつくれば、滝沢という市があるということを全国の人にも認知してもらえるかなということで活動している。

○天野さん

ことしの10月１日に紫波町図書館の館長に就任した。東京都中野区から移住して丸４年になるが、もともとは東北地方にも岩手県にも全く縁はなかった。酒のまちである紫波町のまちづくり事業にかかわっている友人に、紫波町がおもしろいよと紹介され、来てみたら、すごく前向きな雰囲気を感じるところだなと思い、特にこの紫波町図書館が気に入ったので移住した。もともと作家活動をしており、自分の両親の介護について「32歳。いきなり介護がやってきた。」という本を出している。また、チェコ共和国がとても好きで、親善アンバサダーも務めており、その関連本や岩手県への移住についての本も出している。

３年前に地域おこし協力隊に着任して、図書館広報の仕事にかかわるのと同時に、地域活動もいろいろと行ってきた。大きなものの一つとしては、「本と商店街」というイベントの運営を行った。紫波町の日詰商店街では、数年前からリノベーションまちづくりの事業として古民家再生や空き家問題に取り組んでおり、そこから発展してお店を始めた人が何組かいる。その商店街を丸々借りて、盛岡市の書店ブックナードと一緒に、東北地方や関東地方も含めて人気のある作家や、自分で本をつくっている出版社などを招いて販売やトークイベントをするもので、２日間で全国から2,000人ぐらいの来場者があっ

た。
　これまで本にまつわる仕事をしてきた者としても、紫波町図書館の館長としても、本は人を呼ぶものだと思っている。紫波町図書館は子供の読書活動優秀実践図書館として文部科学大臣表彰をいただいており、子供の学習推進を初め、本の可能性はまだまだあると前向きに感じている。

○工藤さん
　民間企業を退職後、縁があり、地元である赤沢地区の公民館の館長を務めている。公民館は教育委員会の所管なので、教育振興運動と関連して子供たちと触れ合う機会が多い。地域として農家が多く、毎日農業で忙しいため、公民館が紫波町からのいろいろな窓口になる機会があり、そういったところからも地域づくりにかかわっている。特に、紫波町では地区創造会議というものがあるのだが、それを赤沢地区で開催するために取り組んだのが始まり。ちょうど農林水産省の都市農村交流事業があり援助をいただき、役場からも支援をいただきながら、地域の宝を整理し、郷土芸能祭やあじさいまつりなども手伝いながら事業を展開した。大げさなことはしていないが、地域の宝を整理できたことは一つの成果だと思っている。今は赤沢地区を宣伝するため、産直の前にマップの展示を行っている。
　また、中学生以上の住民を対象にアンケートを行い、地域の課題やニーズを整理した。どの分野にも共通することだが、担い手不足の中、組織を見直して、再編しながら、社会福祉協議会の中で地域づくりに取り組んでいる。

○平賀さん
　盛岡市に本社がある株式会社みんなのみらい計画という会社が運営する星山えほんの森保育園で園長をしている。令和６年４月に開園したばかりで、紫波町の閉校になった星山小学校をリノベーションして活用している。花巻市出身で今も通っているが、星山地区の自然豊かなよい環境で、子供たちと一緒に過ごせていることにすごく幸せを感じている。
　当園は、暮らしに寄り添う農保連携保育園で、農業と保育と連携して子供の育ちを支えていこうという考え。今は早期教育という言葉もあるが、生きる力に立ち返って、とにかく子供たちが自ら生きていく力を育み、大人たちが支えようという思いで保育をしている。食べること、寝ること、遊ぶことの３つをとにかく大事に、よりよいものを子供たちに提供していきたいとスタッフ一同で頑張っている。
　今は70名の子供たちが星山地区で元気に遊んでいる。地域の無農薬農家が紫波町の豊かな食材を提供してくださったり、また、家が農家の園児も多く、出荷できなかったフルーツや野菜を持ってきてくださったりとすごく支えられている。星山地区は高齢世帯も多く、ひとり暮らしの方もいるが、子供たちの声が聞こえるのがすごくうれしいと言っていただいている。その声を絶やさないように、子供たちの根っこが育つような保育園をこれからも続けていけたらいいなと思っている。

◆　意見交換
○高橋穏至議員
　星山えほんの森保育園について、園児やスタッフの構成を伺いたい。また、開園して間もないとのことだが、公立の保育園がなくなるかわりにできたものだったのか、開園の経緯を伺いたい。実は、北上市内で大きな公立保育園を閉園し、他県の業者が参入して、まちなかの限られたスペースに開園する計画が挙がったが、住民の猛反対によりなくなった。地域の中からは小学校だったところを活用して集約した方が良いのではという声もある。廃校の活用は、もともと紫波町が持っていたコンセプトだったのかも併せて伺いたい。

〔回答：平賀さん〕
　園の構成は、園児が０歳児 11 名、１歳児 12 名、２歳児 13 名、３歳児 11 名、４歳児 12 名、５歳

児 11 名の 70 名で、職員は保育士、保育補助、給食担当、園務員を合わせて 30 名。

閉校利用は紫波町の考えで、当時、まだ私は所属しておらず、詳しいところは説明できないが、何社か手を挙げた中で受託したもの。旧星山小学校は紫波町の木をふんだんに使った木造校舎で、窓も大きく明るくて、デザインとしても保育園にぴったり合うものだったので、移行しやすい環境だったと思う。ぜひ一度見ていただきたい。

保育園はおうちの方が送迎するが、立地としては、学区に関係なく園児が来やすいところで、東の地区だけではなく、商店街のあたりや赤石小学校付近からも来ていただいている。会社の系列の保育園が全国にあるが、町なかのビルの一角という保育園も多い。子供たちの遊ぶ環境、育つ環境を考えると、自然豊かなところがよりいいと思う。園庭もない中で子供たちが保育されているところも多いが、可能なら、自然豊かなところに保育園があったほうがいいと私は思う。

○高橋穏至議員

北上市の計画は、まちなかの保育園と中心部から離れた廃校を利用した幼稚園を統合してこども園にしようというものだったが、計画地があまりに狭く、園庭も本当に狭くて、２階建ての構造だった。資料の絵を見ていて、むしろ中心部から離れたところにある廃校を利用したということで、北上市の場合は校舎自体が古く活用は難しいが、こちらの園はいいロケーションだなと思いながら説明を聞いた。

もう１点、立地について伺いたい。その場所にあることによって送迎が基本だということだったが、もう少し利便性のいいところにあったほうがいいという声はないのか。

〔回答：平賀さん〕

交通の便のいいところは確かにいいが、住宅街の中にあると苦情が来やすい場合もあると思う。星山地区のように気兼ねなく大騒ぎして遊べる環境はすごくありがたい。また、通勤経路にもなっており、あまり山のほうに行き過ぎていない、幹線道路からも近い自然豊かな場所という条件のいい場所だと思っている。

○高橋穏至議員

政策を考えるときにとらわれがちな便利な場所という発想ではないというところも非常に大事だなと感じた。

○吉田敬子座長

私は実際に行ったことがあるが、もしかしたら選んで行っている保護者が多いのではないかと感じた。子供たちに農業をやらせたいとか、自然豊かなところで育てたいということだと思う。私もその視点はすごく大事だと思う。

○大久保隆規議員

まず、浅沼さんに伺いたい。私の地元の釜石市でも、しょうゆ屋が１社だけ残って頑張っているが、大手のあおりを受けて倒産や廃業に追い込まれている方々が大半である。そういう中で、地元にこだわったものを生産されているという努力に非常に感動した。４代目として代表職につき、地域資源を生かしたということへの思いや着想の原点を伺いたい。

次に、松本さんに伺いたい。私も農林水産委員会の副委員長を勤めており、鹿の被害には私なりに思うことがある。釜石市と大船渡市の間にある五葉山の鹿が遠野市のほうに山を越えて行っているのかと思う。ことしは大変な鹿の被害でリンゴが６割ぐらいしか収穫できなかったと伺ったが、その辺の実情や取り組み、困り事について率直にお伺いしたい。

〔回答：浅沼さん〕

父もそうだったと思うが、代々何とか生き延びる道を探してやってきたのだと思う。国産とか地元にこだわるというよりも、創業したときは、地元の農家の大豆でつくり地域に返す、地元のしょうゆ屋にはかり売りで買いに行くのが普通だった。それが、だんだんサプライチェーンが伸びてきて、海外から入ってきた大豆や小麦を使ったほうが価格もずっと安い。こういう変化がじわじわと来る中、特徴的な商売をしないと生き延びられないということで、父は調味料の加工にかじを切ったのだと思う。時代の変化で、しょうゆの価格はものすごく下がってしまった。昔はしょうゆ一本が大体散髪代と同じぐらいと祖父に聞かされた。今の相場だと大体3,000円ぐらいかと思う。低価格でカットしてくれるお店もできたが、しょうゆは安いときには一本100円を切る価格で特売の目玉になっている。そんな価格で散髪してくれるお店はさすがにないわけで、我々が地元のものを使って、頑張ってつくっても散発代くらいに価格を戻すのは難しい。低価格化が進む中で、発酵技術や熟成技術というところが自分たちの強みかなということで事業を少しずつずらして展開してきた。そうじゃないと生き残れないというところがあるので、周りの同業者も事業の軸をずらしている。今はライバルというよりも仲間で、よく残っていたなあ、やめると寂しくなるから何とか頑張って続けていこう、という関係。輸出に力を入れる事業者、観光客のためにいろいろな観光業と一緒に展開する事業者、それから漬物屋とかと組んで、そのしょうゆを使った別な加工品をつくるというところもあり、いろいろな形で、それぞれ生き延びる道を変えてきているのかなと思う。

直近では、やっぱり原材料の高騰や賃金の上昇などが変化として大きい。対応できるように取り組んでいきたいとは考えるが、値上げしたくてもできない会社に一番しわ寄せがいく。ある程度事業がうまくいけば、もうからない仕事は最悪なくなってもいいやと思い切って値上げを要求できるが、そういう余裕がなく、この仕事が切られたら生活していけないという会社は、我慢せざるを得ない。原材料が上がっている中、なかなか価格に転嫁して事業展開できない会社は本当に苦しい。弱者にしわ寄せがくる仕組みなので、そういう時、一呼吸ついて事業の軸を少しずらすことに挑戦できるチャンスが与えられると助かると思う。

〔回答：松本さん〕

鹿の被害は本当に甚大で、電気柵も回すが、傾斜面に畑があるために飛び越えてしまう。電気柵は２メートルは必要という意見も聞くが、そうなると自分たちでできるものではない。一生懸命草刈りをして空き地をつくりなさいとも言われるが、それももうやっていて、やっても入ってくる。花芽を食べられてしまい、その時点でもう花がなく、ことしは不作だというのがわかる。収穫が進むにつれてやっぱりなの連続で、最終的には６割にしか届かなかった。

まず５年は体力が持つのだけども、もうこのやりとりにほとほと疲れてしまう。効果は全然出ないし、何をやっても入ってくる。あと５年続けるつもりだったがもうやめるという農家仲間も現実に出ている。こんなに早くこの日が来るとは思わなかったと。本当に深刻で、県も市も、何かいい方法はないかといろいろ考えてくれるが、決定打がないままここまで来てしまった。もう頭数を減らすしかないと思う。ジビエ料理がどうとか、ハンターをふやしてどうとか、どれも時間がかかることばかりで、もうどうしたらいいのかと。きょうあすのことなので、お知恵をください、実行してくださいと言うしかない状態。温暖化については、日々の生活で努力はするが、手が届かない範囲。鹿の被害は何かできるのではないかと思いつつ、ここまで来ているという感じ。

あとは、ふんの被害もすごい。「りんご畑deコンサート」は、リンゴの木の下にシートを敷いて座ったり草原に座ったりしてクラシック音楽と満開のリンゴの花を楽しむという趣向だったが、もうどこに腰をおろそうか、ふんがすごくて座る場所がない。実行委員のメンバーから、自分たちで拾って会場を綺麗にして開催しようという意見が出るほど熱心なスタッフに恵まれてはいるが、拾ってもまた次の朝に行けばあるという、その繰り返し。本当に大変なところまで来てしまっている現状。

○大久保隆規議員

鹿がふえたと感じたのはいつ頃か。

〔回答：松本さん〕

コロナ禍により、「りんご畑deコンサート」の第10回目を中断せざるを得なかったのだが、このパンデミックを境にぐっとふえた。人が畑に入る回数が減ったせいなのか、それとは関係ないのかもわからないが、タイミング的にはそのような印象。それまではそこまでひどくなかったと思う。畑の被害くらいだったのがイベントにも影響するようになり、ほかにもカフェに来るお客さんが遭遇するようになった。薄暗くなってから私たちがカフェから帰ろうとすると、茂みから目が光っていて飛び出してくることもある。明るい時間も暗い時間ものべつ幕なし。

○大久保隆規議員

鹿の被害は深刻な問題。釜石市も本当に丸ごと奈良公園みたいな感じで、日本製鉄の工場の中にも鹿が闊歩している。また、鹿はグルメで、やわらかい草しか食べないので、リンゴの白い花は最高においしくて被害に遭ってしまうのだと思う。今はさらに、大船渡市で猿がふえ出している。鹿の次に猿まで加わっては大変だということで、農林水産委員会でも話に挙がっている。今のようなお話も検討の参考にさせていただき、今後どういうことをしたらいいのか模索していきたいと思う。いずれ頑張ってください。

○はぎの幸弘議員

鹿の話が出ましたが、遠野市が県内で一番捕獲数が多いと思う。もしかしたら早池峰山を越えてそちらに行っているのかなと感じたところ。

駿河さんに伺いたい。スイカの缶詰やスイカ蜜という発想が私にはなかったため驚いた。そういったものは自分たちで考えているのか、コンサルタントとかが入っているのか、その辺の開発の経緯を伺いたい。

〔回答：駿河さん〕

特産品というか６次産業化として最初に開発に取り組んだのは、６年ぐらい前のスイカのドライフルーツ。東京都のドライフルーツ屋で見つけたことがきっかけ。すごく珍しいなと思い、せっかくスイカをつくっているので、これが岩手県でもできないかと、店長に直訴してつくり方を聞いた。深くは教えてくれなかったが、それでもさくっとしたところは教えてくれて、乾燥機を持っている福祉施設に打診したところ、おもしろそうだからやってみようということで、１年間は試行錯誤で、２年目に商品開発に至った。

次のスイカの缶詰は、今から５年前に最初にトライした。なぜスイカの缶詰かというと、やっぱり滝沢市を広めたいなと思い、そもそもスイカの加工品はあまりないのだが、世の中に出ていないもの、絶対誰もやっていないものをいろいろと検索した結果、国内で誰も販売していないとわかり、缶詰加工を始める会社があったので、一緒に取り組んだところがスタート。どのような形でつくればいいのか、土台、ベースがわからなかったので、岩手県工業技術センターに間に入ってもらった。このような形でやればいいんじゃないかというのを教えていただき、１年間かけて試行錯誤した。ただ、当初一緒にスタートした加工業者が、販売加工の施設がなく免許が取れなかった。これでやめるのはもったいないなという話をしたら、大船渡市の福祉施設が、ぜひやりましょうということで、開発を再スタートして、やっといい感じのものができたというのが３年前。今は年間大体600缶ぐらいつくって販売している。

スイカ蜜は昨年からつくり始めて、これは尾花沢とか、スイカの名産地には既にあるが、岩手県内ではつくっている方もおらず、あとはスイカの蜜の効能というのもある程度いいのではないかということでつくり始めた。昨年から販売しているが、１つつくるのに、コストが5,000円ぐらいかかってしまう。去年販売価格5,000円で出して４つ売れた。さすがに１年でやめるとは言いにくいので、ことしもつくってもらい、原価割れの4,000円で販売して、今のところ１個しか売れていない。ただ、スイカの缶詰をつくっている業者にやってもらっており、個数も15瓶ぐらい。もともと加工品ではなく農業がメインで、興味を持ってくれればいいなという名刺がわりでつくっているので、赤字だというわけではない。このような形で、商品をつくっているところ。

○はぎの幸弘議員

次に、天野さんに伺いたい。天野さんはＩターンということだが、今、若い女性がどんどん県外に流出していることが岩手県の課題である。若い女性が減るということは、もちろん結婚する機会も減り、子供も減るということで、岩手県だけではなく日本全体の課題ではあるが、どうしたらいいのかと私も思っている。逆に天野さんは進んで岩手県に来ていただいた。図書館がきっかけとは伺ったが、女性目線で、岩手県がどういうことをやっていけば、もっと若い女性がふえるかというところを伺いたい。私は、幾ら政策をやっても本人が出たければ出るわけで、やっぱり本人がいたいと思わなきゃだめだと思う。そういったところでヒントを伺えればと思う。

〔回答：天野さん〕

地域おこし協力隊は３年間の移住制度で、試しに暮らしてみて、働いてみてどうかというもの。岩手県に来たのは偶然の重なりだったということもあるが、私自身の経験で言うと、決め手として大きかったのは、３年後、住んでも住まなくてもいいよ、というようなことを言ってくださったこと。移住して、合えばそこに永住みたいなことをそれなりに期待されていて、今でもよく言われるが、やっぱり永住はすごく重い言葉で、私は今でも永住とは言いたくないなと思う。定住とか永住とか、そういうプレッシャーがあまり強くないというのは結構大きいかなと思う。結婚出産に関してもそうで、この地域からもう出られないのかと思うことはすごく怖いと思う。今地域活動もしているが、そういう温度感として、あなたはここにいてこれをやらなければいけないというプレッシャーや圧力を感じれば感じるほど居心地が悪いというのはすごくある。そういう意味で、うちの職場もそうだが、紫波町は、もともと南部杜氏の歴史としても、近江商人の歴史というか人が往来するという動きが結構あったからなのか、移住者に寛大なところがある。来たら絶対逃さないぞ、みたいな雰囲気はないほうが個人的にはいいなと思う。

○はぎの幸弘議員

プレッシャーを感じないところがいいと、地元選出の村上秀紀議員もプレッシャーを感じない優しい男だから、何となく紫波町の雰囲気がそうだということがわかる。すごくいいヒントになった。

○菅原亮太議員

天野さんに伺いたい。私も同じＩターン組ということで、大変親近感を抱いている。友人の紹介で紫波町にいらしたとのことだが、ほかの市町村もしくは他県も見たりされたのか。

〔回答：天野さん〕

実はほとんどしていない。たまたま御縁があってタイミングがよかったので決定した。漠然と移住願望はあったが探してはいなかったので、本当にタイミングがよかった。

○菅原亮太議員

私の地元の奥州市でも地域おこし協力隊がふえてきているが、皆さんはどういう取っかかりで岩手県とか紫波町と決めているのか、すごく疑問に思っている。天野さん自身もそうだが、周りの地域おこし協力隊の方々がどういう取っかかりで選んだ方が多いか、印象を教えていただきたい。

〔回答：天野さん〕

紫波町の場合は、協力隊の採用が企画提案型で、自分のキャリアとかやりたいことをプレゼンする。自分はこういう経験があるので、こういうことに役立てたいというようなことを町にプレゼンし、それが何か町の事業とマッチしていたら採用するという形で、町内でも町外でもいいが、３年後にこういうことをしたいから今紫波町でこれをやるというような話ができる人が受かっているという印象。卒業後の進路を見据えて受け入れ先でサポートしていただいているおかげなのか、卒業後も町内に住んだり、町外に引っ越しても町内で事業を続けていく方も多く、しっかりつながっている印象。

移住者は、基本的に私のような東京都とか関東地方から来た人は少なめ。最近は東北地方からのＵターン、Ｉターンの方が多い。県内出身でも、地元ではなく紫波町を活動場所に選ぶ方もいる。あとは、ミッション型採用という、何かの事業にひもづいて採用された方には関東地方出身の方もいる。紫波町は活動しやすいという印象があり、町の協力も得やすい。基本的にミッション型以外の協力隊は企画課とか地域づくり課の所属になっている。例えば福祉分野にかかわる協力隊もそこに配属されており、専門分野の課にそれぞれ配置するのではなく、協力隊をまとめている。そういうところに軸足を置いたほうが垣根を超えた活動ができたり、多分野の隊員が横でつながるなど、活動しやすい場合もあるなと感じている。

○菅原亮太議員

工藤さんにお伺いしたい。赤沢地区の公民館の館長として地域活動に貢献されているということで、本当に敬意を表したい。赤沢地区も結構中山間地域で、私の地元、奥州市江刺もそうだが、今中山間地域では公共交通、地域住民の足が課題である。これについて、今、赤沢地区としてデマンド交通とか、何か取り組みを行っているかお伺いしたい。

〔回答：工藤さん〕

高齢化が進み、免許を返納する方や町のバスを利用する方も出てきている。地域づくりとしての高齢者対策という中で、アンケートにもバスがないとか、そういう困り事についての回答があった。そういったものをどう解消するかについて、どういう形にするのか、やはり有償ボランティア的なことも考えなければいけないのではないかという話し合いをしている。私たちは社会福祉協議会を母体とした地域づくりをやっているが、高齢者福祉委員会の中では、冬の雪かきとか、そういうことも考えなければいけないということが出てきている。そういったことを社会福祉協議会の中で検討していくというのが今の方向。

デマンド交通を利用している方もいるが、あれは何人かで共同で乗るため、自分のところに直接すぐというわけにはいかない。申し込んだ人たちが相乗りした中で順番となり、タクシーのような使い方はできないが、それでもないよりはずっとましではある。

○菅原亮太議員

デマンド交通の活用はあまり進んでいないという印象か。

〔回答：工藤さん〕

進んでいないというより、まだ自分たちの車がそばにあり、必要性を強く感じていない。でも、今

後必ず出てくると思う。

あとは買い物をどうするか。買い物を手伝うというか、移動販売のように出向いてもらって、いろいろ物を買えるようなものをつくろうかという話も出ている。特に農業をやっている方々がおやつが欲しいというときに、そばにコンビニもないというのが地域の問題点。コンビニと協定を結んで出張コンビニのような形もできるという話もあり、そういったことも利用できるようになればいいなということが検討材料になっている。

○菅原亮太議員

いろいろと県政に反映していきたい。引き続き御指導のほどよろしくお願いしたい。

○小林正信議員

工藤さんにお伺いしたい。先ほど、都市農村交流事業を活用されているということで、この点を具体的に教えていただきたい。また、活動する中でその地域にさまざまな宝があるというお話もあり、魅力化というか、地域を盛り上げていく宝はどういったところにあったのか。今後、人口減少、少子高齢化の中で、地域で助け合う、支え合うということが非常に重要になってくるのだろうと思っている。その先駆けとなるような取り組みをされており、町内会の関係もあるかと思うが、公民館が中心というのはすごくおもしろいなと感じた。この地域の支え合い、助け合いというところの、具体的な取り組み、また、今後をどのように考えていらっしゃるのか伺いたい。

〔回答：工藤さん〕

「赤沢まるごと博物館」ということで、赤沢地区にあるもの全部が展示物、屋根のない博物館という捉え方で、その地域のお宝を整理した。赤沢地区はどの分野を見ても、いろいろなものがある。例えば、歴史的に見れば平泉とも関係が深く、藤原清衡の父である経清が赤沢にいたということもあり、それをたどっていくだけでも１つの事業ができるなと思う。あとは、産業的にリンゴとかブドウとか、地質的に見てもすごく魅力的な土地で、御存じのとおり、赤沢産のものは随分評判がいい。そういう資源をどうするかという中で、私どもでいろいろな分野の赤沢の宝を全部マップに整理した。どれから入るか、切り口をどれにするかという整理はできたと思う。ただ、本来、農林水産省の都市農村交流事業は、民宿とか、そういうことを独自でやってもらうことに結びつくようにというもので、私たちもやらせていただいたが、どうしても赤沢地区は農業が主のため、宿泊の方々まで入れてというところまではやっぱり難しく、そこまではたどり着かなかった。それでも、国指定の山屋田植踊りを含み地域に５つの郷土芸能があって、それらを一堂に会して皆さんに来ていただくということはできた。あとは、あじさいロードということで、地域の方々が１周４キロぐらいのところにアジサイを植えて、今すばらしい観光資源になっており、そこで実行委員会をつくってあじさいまつりを行った。集客できることは実証できているので、それを継続的にどんどんやればいいのだとは思うが、まだそこまではというところ。あじさいまつり自体は続けているが、これは私たちが取り組む前からのもの。どういう切り口でも地域のものをつくろうとすればできるが、誰がやるのかということになる。ちょっと話がずれるが、誰もが主人公なんだ、誰がやるんですかではなく自分たちがやるんだという、そういうことを地域づくりの中で進めている。

○小林正信議員

みんなであじさいまつりを盛り上げて、地域の方の協力とか、そういったところでいろいろな人が活躍できるようなものを見出しているのだろうというところで非常に参考になった。

次に、駿河さんにもお伺いしたい。私も実家が滝沢市で、勝手にシンパシーを覚えている。滝沢市のアピールを一生懸命やっていただき、本当にありがたい、うれしいなと思ってお話を聞いていた。

お父さんの農業を継がれて、やっぱりうまくやるにはなかなか難しいところもあるのではと感じた。うまくいっている方はいるとは思うが、途中で営農の継続ができないところもあると思う。農業もさまざまな分野があるので一概には言えないかもしないが、農業を継続していく御苦労や、今後の農業の未来、地域における農業についてのお考えを伺いたい。

〔回答：駿河さん〕

親元就農だが、父もともとサラリーマンで兼業農家だった。早期退職して農業一本になってから、５年後ぐらいに私がサラリーマンをやめて就農した。親子での意見の相違も若干あるが、ほかの人に比べればそれほどではないのかなと思う。私が農業をやるとなったときに、経営の判断は私のほうにしてもらったので、そこで父がどうこう言うことはあまりなく、１歩引いてくれている。比較的、農業がやりやすい環境ではある。

地域の絡みで言うと、農地中間管理機構という農林水産省の補助事業で、地域350世帯400ヘクタールぐらいの集約化に当たって、これから代表理事をやるところで、どちらかというと家のことよりも、今は地域を今後どうしていくかに頭を使っている。先ほど工藤さんがおっしゃった、地域づくりは他人ごとではなく自分たち一人一人がということはそのとおりだと思う。今現在は、やはり言い出しっぺ以外の人たちが、何でも協力するよと言ってはくれるが、その先のステップがなかなかというところ。地域の人の一体化まではほど遠く、率先している人たちだけが動いている状況が続いている。そこをどうにかして、住民、農家一人一人がうまいぐあいに地域として活動していく、みんな一人一人が活動していくんだぞという意識づけを今後していきたいと考えており、今は地域の課題のほうがウエートが大きいという現状。

○上原康樹議員

まず、浅沼さんに、地域の歴史的な建造物や景観をどうやって守っていくのかについて伺いたい。盛岡市紺屋町の菊の司酒造の建物が取り壊され、地域の人は非常にショックを受けた。これはまだ生々しい記憶というか現在進行形で続いている問題だと思うが、浅沼さんはあれをどういうふうに御覧になっているか。

〔回答：浅沼さん〕

非常に難しい問題だと思う。うちの店も築250年ぐらいで、典型的な盛岡町家のつくりをしており、昔の不来方城の改築の際に柱をいただいたというのも残っている。そちらも事業が継続できなくなると、活用は難しいなと思っている。外壁を張ったりして直しているので、あまり築200年もたっているような建物には見えなかったが、中は町家のつくりを残している。私が生まれ育った実家でもあり、私の御先祖様にとっては生活の場であり、商売のなりわいの場であった。今は工場が移転したので、あまり活用されずに、町家としては空き家に近い形だったのが、去年の９月に、町を歩く人たちが腰をかけて休めるような、半分公園のような、公共で使えるスペースにできたらいいなということで岩手県産材を使用して改装した。観光客や東家の待ちのお客様もたくさん腰をかけるし、親子３代で町家の軒下に腰をかけて休んでいる姿とかを見て、本当にやってよかったなと思っている。私の御先祖様も、この家も喜んでいるなと感じている。やはり事業を継続して安定させることと伝統資源を活用していくこと、この両方を継続してやらないといけない。菊の司酒造の件についても、ディベロッパーのほうからすれば、14階建て以上にしないと採算がとれないから、周りがどう言っても、経済合理性の部分を優先させれば、どうしても高層階になってしまう。土地の活用について、ある程度の効率を考えなければいけないということであり、そちらにも正義というか、正しさはあるのだと思う。経済的な側面と、町を快適に、自分たちで持って行きたい方向に守る側面を両立しながら維持して次世代につなぐことが必要かなと思う。話しながら、うちの建物も維持できるように、経済的側面でも頑

張らなければと気持ちを新たにした。

○上原康樹議員

歴史についての非常に興味深い話で、そういうものを担われて、なりわいに取り組むという意識をお持ちだということがよくわかりうれしく思った。これからもそういう地域の景観というか、歴史的な建造物についての思いを強く持って活動していただきたい。これはリクエストになるが、よろしくお願いしたい。

次に、工藤さんにお話を伺いたい。10年ほど前に、赤沢公民館で講演をさせていただいた。あのときのテーマは、私は仕事でちょっとしたミスをして、極端に言うと、左遷されてこの岩手県にやってきたのだが、実はそれが私の家族にとってすばらしい環境を手に入れるきっかけになったという、感動の話をさせていただいた。あれは一生の思い出で、ありがたい限りだ。私はよく赤沢地区をオートバイで走り回っていた。あそこから細い裏道をずっと大迫町のほうに行くと、神楽の里にたどり着く。先ほど工藤さんが、伝統芸能を担う人材の確保の話をされたが、岩手県は日本古来の、500年とか1000年とか、そういう長い歴史を背負った芸能を担っている地域である。この時期になると、神楽や鬼剣舞、さまざまなすばらしい芸能民俗文化財を間近で見ることができる地域だが、やはり、お年寄りも少なくなり、そして子供もなかなかふえないという中で、こういう人間力で支えられている世界は、その維持も大変なのだろうと思う。工藤さんの御感想としては現状、どのような状態か。

〔回答：工藤さん〕

その節は本当にありがとうございました。今、私どもには郷土芸能が５つあるが、やはり子供が少なくなったことで、子供役が足りなくなっている。どう維持するかということが大変なのだが、今赤沢地区では、こういったものを継ごうという若い方々が出てきており、子供も５つの団体の中でお互いに貸し借りというか、支え合う体制ができたので、いいなと思っている。ただ、やはり維持するためには練習する機会も必要なので、芸能祭りとか、各団体が発表できる場をつくっていきながら、練習して維持していくというところが現状である。

○上原康樹議員

実はおととい、文化芸術振興議員連盟の講演会があり、滝沢市の篠木神楽を見たが、舞台の主役は小学生だった。県の事務局が出演を交渉したら、会長がぜひ子供たちを出してほしい、こういう舞台が子供を育てるんだ、子供たちの生きがい、やりがいになるから、ぜひ出させてほしいという、非常に強い意欲というか、哲学を語ってくださったということで、子供たちがにこにこして踊っている場面をカメラにおさめることができて非常に幸せだった。そうした世代を超えたチームワーク、地域社会の生命力として、伝統芸能の継承というものも私はあると思うが、どのようにお感じか。

〔回答：工藤さん〕

難しい部分でもあるが、やはり継いでくれる方々が出てきている。今の子供たちはあまり好まないかなと思ったが、結構さんさ踊りとかにも出たりして、盛岡にも呼ばれているので、子供たちを大切にしながらやっていければいいのかなと思う。

もう１つ、練習する場について、公民館の建物は少し床がかたいのだが、踏んだりするときにはやはり板の間のあるところでないといけない。そういう練習の場を確保することも含めて、一緒に考えていかなければいけないと思う。また、昔は１軒１軒を回り、いろいろお米をもらったりしながら維持していたが、今はそういう機会がなくなってきている。やはり地域の中で、保存会を支援していくような仕組みをつくっていきたい。

○上原康樹議員

稽古場の床板の質感が伝わってくるようなお話で、私たちが何を応援すればいいのかという具体的なアイデアだったと思う。赤沢地区の皆さんが、そういう伝統を１つの絆にして、さらに元気になっていければすばらしいと思う。さらなる工藤さんの御活躍を期待させていただく。

○村上貢一議員

きょうはテーマのとおり、まさしく、魅力ある皆さんの集まりだと思うし、ここにいる方々が地域資源だと思う。岩手県の人口は約114万人で、県央圏域の人口は43万人ぐらいと、大体半分に近いような人口の中で、盛岡市を中心に大学があり、専門学校があり、また、スポーツ施設や、食、観光もあるが、私はやはりスポーツにしても、観光にしても、食にしても、ツーリズムにもっと磨きをかけていくことが大事だと思う。たくさんいる学生、若い人たちと皆さんがコラボレーションするというか、しっかり巻き込んでいく。そういう中で、さっき松本さんから、地域資源は人だという話があり、まさしく私もそのとおりだと思っている。そういうツーリズム、観光、例えばスポーツ合宿とか、紫波町は自転車もあるし、スポーツ施設にも恵まれている。これからそういうところに注目してやっていくということが大事だと思うし、皆さんのなりわいの中で頑張っていただきたいと思っているが、県央広域圏の強み、弱みを皆さんがどのように思っているか、県に何をやってほしいか、どこを伸ばしてほしいか伺いたい。

〔回答：天野さん〕

紫波町で言うと、ちょっと難しい部分もあると思う。紫波町のオガールには視察の方が多く来るけれども、やっぱり観光地ではないというところが弱みとしてあり、例えばお土産に何を買っていくか、いつも結構迷ってしまう。リンゴやブドウ、お酒、お米、全部重いという感じで、改善の余地があるなと思う。各所そうだと思うが、来ていただくとすごく楽しいところなのだけれども、知り合いがいないとなかなかこのまちのおもしろさに気づけない。そういうふうな形で観光産業を中心に置いていないということもある。課題はいろいろあるかと思うが、可能性は大いにあると思う。

〔回答：平賀さん〕

やはり岩手県は広いので、とにかく移動距離が長く、つながりを持ちづらい。こっちにも行ってみたいと思っても、そこに行くにはあと半日必要とか、そこが難しい点かと思う。

保育に関連すると、自然豊かで、温泉もあって、食も豊かというところで、取り組み始めている部分もある。これはゆとりのある方しか難しいかもしれないが、冬休みや夏休みなどのある一定期間、都会の子供たちが自然豊かな環境の中で過ごし、保護者もそこで仕事が可能という取り組みは、地方だからこそできるものだと思う。子供たちが、沿岸部で漁師体験をしたり、農業体験をしたりということができる点では、岩手県はすごく豊かな場所だと思っている。この保育留学は、今回は応募がなかったが、紫波町でやれたらいいなと思っている。保育園でお子さんを一時的にお預かりして、ラ・フランス温泉館もあり、体験もしながら過ごせるというものを考え始めてはいるが、まだ実践できておらず、これからかなと思っている。

○村上貢一議員

皆さんのなりわいは、全て郷土愛の醸成につながっていくと思う。それがひいては人口減少問題の解決につながる根本のところだと思うので、ぜひ、皆さんのなりわいの中でファンをつくってもらって、工藤さんには地域コミュニティーをこれからもっと復活させてもらいたい。これからもしっかりと御自分のなりわいをブラッシュアップしてほしい。子供たちに郷土愛の醸成があれば、必ずや最後にはサケのように帰ってくると思う。我々も一生懸命頑張りたい。

○畠山茂議員

先ほど村上貢一議員からも紹介があったが、きょうのテーマは、県央圏域の地域資源を生かした魅力ある地域づくりということで、沿岸地域からすると県央地域はすごくうらやましい。人口も多く、歩いてみると若者も、子供も、若い女性も多い。令和６年の春に消滅可能性自治体が発表されたが、岩手県内33市町村のうち26が消滅し、残るのが大体国道４号線沿いなので、それも沿岸からするとうらやましいところ。きょうの参加者を見るとかなり職種がバラエティーに富んでいるが、普段住んでいる、あるいは普段仕事をしている中で気づいたこと、もっと行政がこういうことをやったらいいんじゃないかとか、こういう課題があるんじゃないか、というようなことがあればぜひお聞きしたい。

〔回答：天野さん〕

きょう言い残したことだが、「本と商店街」というイベントをやらせていただいたとき、中心に置いたことがある。先ほど菊の司酒造の建物の話でもあったが、商店街が全国的に衰退傾向で空き店舗がふえている。もともと個人の方が何か買い物をする、例えば本を買うというとき、書店で買うのかアマゾンで買うのかというところで、まちの商店がどんどんなくなってきている事実もあり、みんなネットで買ってしまう。ただ、自分の地元にすごく好きな本屋があったら、取り寄せにちょっと時間がかかってでもそこで買うようにする、そういう消費活動がもっとできるといいなと思う。それが「本と商店街」の目指すところ。それは本だけでなく、魚にしても野菜にしても、特に岩手県の場合は身近に生産者がいるので、そういう方から直接買うという、普段の消費活動を通じて、何か日常に変化があったらいいなという思いがある。

回答になっているかわからないが、地元の資源として私が移住して感じているのはやっぱり食の強み。ただ、岩手県の絶対的特産品は何かと言ったときに、もちろんいろいろあるのだが、私も移住する前はあまりイメージがなかった。これというふうに打ち出すのが難しいのかもしれないが、住んでみると、とにかく何でもおいしい。だから、何か物としてというのも大事なことだが、そういう住んでみての地元のよさ、人のよさの部分、個人としてどういう生活をしているか、ちゃんと顔が見える地元のお店で物を買うとか、自分の生活自体をよくする。そうしたらすごく豊かに暮らせているよという発信を、私は結構している。岩手県の生活において大事なことかなと思っている。

○畠山茂議員

気持ち、考え方はよくわかる。できるだけ地域を活性化するために、地域では地域なりに、食料でもエネルギーでも地域内循環、お金も物も地域で回しましょうという流れがある。ただ一方では、先ほど言ったとおり何でも通販で買えて、そっちの方が店で買うより安いということもある。社会も進歩しているので、なかなかバランスが難しい社会にこれから確かになっていくと思う。有識者の中には、あと何年後かには人口の７割は都市に住むと言う人もいる。どうやって地方が人のつながりをもって生き抜いていくかというのはこれからの課題だと思う。これからも皆さんの御意見をいろいろ聞きながら、いい岩手県をつくっていきたいと思う。

○吉田敬子議員

最後に一つだけ、平賀さんに伺いたい。きょうは魅力ある地域づくりというテーマだが、保育園では保護者に対していろいろな負担軽減策を実行されていると伺った。例えば、給食も子供たちが自分でつくったり、馬を連れてきて田植えを見せたりという取り組みをしていると伺ったが、活動を行う上で必要な支援策や課題があれば伺いたい。

〔回答：平賀さん〕

星山えほんの森保育園は農保連携で始めたが、農地がなかなか手に入らず、そこにすごく苦労している。圃場整備され、そうなると、私たちみたいなちょっと借りたい人が借りられない。今は隣のおばあちゃんに田んぼを１枚お借りしたりしている。やりたい気持ちはあっても、農地を手に入れて実践することが私たちのような個人ではなかなか難しい。

保護者の支援というところでは、核家族化も進んでいて、子育てしながらお仕事もされているという中で、お父さんお母さんが苦労されていても、それを発信するエネルギーもない。本当に困っている人こそ声を上げられない状況もある。物価も高騰しており、ファミリーサポートを使いたいが、１時間500円かかるとなるとちゅうちょしてしまい使えない、我慢するしかない、何とかするしかないと言っているうちにストレスがどんどんたまって、子供に向いていくという現状もある。無償で利用できるような制度ができると、お父さんお母さんは本当に助かるだろうなというふうに感じる。

あとは、やっぱり保育士。保育士が元気で仕事ができるとよりよい保育につながっていくので、国でもいろいろと声は出てきて処遇改善も進められていくのかなと期待はしているが、そういう部分でも応援していただけるとありがたい。

ＳＮＳの便利さだけでは子供たちは生きていけないと思う。子供たちが未来を生きていくのには、やっぱり生きる力がないといけない。子供たちがどんな環境で育つのがいいのか、生きていく力をどう育てていったらいいかということを、もう１回みんなで考えていけたらいいなと思っている。

◆　感想

○浅沼さん

私は食産業が中心だが、皆さんのような地域の中で活躍されている方や議員など、異業種の方々とお話できてよかった。皆さんすごく頑張っていて、頻出した地域愛というキーワードは、本当に大切なことだと感じた。

100年前もうちの会社はベンチャーで、思い切って創業したと思う。老舗とは言われるが、やっぱり今の時代に合った新しい事業の形が望まれているのかなと思う。ベンチャーという横文字になると、地方には少しなじみにくい言葉のような気がするが、新しく何かに挑戦しようと思われている方々が、新しい時代に合った形で創業できるような支援が行き渡るとこれから先の時代が少しずつ切り開けるのかなと感じている。

○松本さん

皆さんと御一緒できて、とても参考になること、初めて聞くこともあり、有意義な時間だった。議員の方々の発言で、皆さんの話がまたぐっと引き出されるところもあり、いい質問をしてくださったなと思った。せっかく今回こうして御縁をいただいたので、それぞれが何か新しいことをするときやイベントをするときは、ぜひお互いに絡んで、先生方にも足を運んで応援していただくきっかけになればより一層いいなと思った。

○駿河さん

先ほど畠山議員から県央地域がうらやましいという話があったが、もう本当におっしゃるとおりだなと思った。私もドライブが好きで、県内各地、沿岸から県北山間部のほうまで行ったりするが、本当に空き家や耕作放棄地が多くなったり、電気柵を張りまくっているけれども鳥獣被害がなくならないという地域を見ると、滝沢市のある県央の平野部というのは、どれだけ恵まれているんだろうと改めて思った。

議員の中で、今回女性が吉田議員だけなので、１つ質問したい。農業団体の法人を立ち上げた際、女性を理事に入れたいという気持ちがあったが、諸事情により断念せざるを得なかった。総会のときにも、一般質問で、なぜ女性を入れないんだという話があった。地域の取り組みとしてやるからとい

うことで何人かに声をかけさせてもらったが、やってもいいけどお飾り程度であればと言われたりした。男女雇用機会均等法もあるので、お飾りではなく、男性女性関係なく、実務を一緒にやってほしいという思いがある。どのようにして女性を取り込めばうまくいくか、何かお聞かせいただければと思う。

〔回答：吉田敬子座長〕

お願いする人数とかがわからないが、女性がゼロだったところに急に１人にだけお願いするというのはちょっとハードルが高いのかもしれない。もしできるのであれば、せめて２人ぐらいとか、数から攻めるというのはどうか。例えば、日本ではまだないが、議員もクオータ制とか、数からも攻めていて、そのようにしていかないとなかなか難しいのかなと思う。あとは、地域事情もあるので一概には言えないが、この人だったらできそうかなという方にある程度アプローチをしながら、でもその人だけが役員だということにならないように、女性だけでなく男性も含めて、何人かの方が一緒にやります、支えますよという雰囲気づくりは結構大事だと思う。松本さんは、盛岡市の都南地域の大先輩なのだが、女性が地域でやっていくというその積み重ねで、私以上に本当に御苦労されてきた方だと思う。地域によっても多少違うのかなと思うが、ただやっぱり、その方１人だけに、じきじきにあなたどうですかというのはちょっと難しいかなと思う。周りを上手に巻き込んで、一緒にやっていく環境をつくっていくということかなと思う。いろいろな環境で女性がふえるのは大事だと思うので、よろしくお願いしたい。

○天野さん

紫波町図書館の館長という肩書きで参加したが、まだ就任したてなもので、図書館の話ではなく、地域おこし協力隊と個人の作家としての話が中心になった。岩手県は「文学の国いわて」というくらいなので、作家も多いし、盛岡市を中心に本屋が結構多いというのも、移住に当たっての私自身の大事な判断要素でもあった。私は本と創作の力というものをすごく信じていて、岩手県はそれが発揮しやすい環境だと思っている。先々週ぐらいに岩手日報社の日報総研という紙面でも書いたが、遠野市に中野活版印刷店という新しい印刷所ができたり、ブックナードという盛岡市の書店だったり、本にまつわる全国的にも珍しい取り組みをしている方が結構いる。そういうおもしろい人たちとつながってやっていくとか、そういう本好きの世界だけではなくて、もっといろいろな人を巻き込んで商店街の活動をするとか、盛岡市も紫波町も個人事業主、個人商店が多いので、そういった顔の見える方から何かを買うとか、そういった活動も、子供たちを含めて、意識しながら取り組んでいきたいと思った。

○工藤さん

私たちのさまざまな取り組みの中で、赤沢にはいろいろなものがあって幸せな地域だなと思っていたのだが、東京都から来られた方で、10キロぐらいのスポーツサイクリングのコースをつくりたい、赤沢小学校の旧校舎をクラブハウスに活用したいという提案をされた方がいた。箱根でそのようなことをやっているという方々も一緒に赤沢を見に来たのだが、すばらしいと言う。私たちにしてみれば、普通だと思うのだが、きょういろいろと皆さんのお話を聞いた中で、そういうところをもう少し私たちもまた見つめ直しながら取り組んでいきたいと思った。

○平賀さん

保育園は、新型コロナウイルス感染症のこともあってなかなか閉鎖的な部分もあるのだが、開かれた保育園にしていくためには、いろいろな大人の方にかかわっていただきたいと思っている。議員の皆さんにもぜひ保育園に遊びに来ていただけたらありがたいし、きょうお会いした皆さんともつなが

りを持っていきたい。保育園という場所は、どんな方も来られる要素がいっぱいある場所だと思っている。きょうはたくさん応援をいただき、ありがとうございました。

○吉田敬子座長

魅力ある地域づくりをテーマに意見交換させていただいたが、皆さんからの御発言で、人づくり、人が資源だということがすごく感じられた。きょうはいろいろな業種の方にいらしていただき、やはり人が根本にあるなということを改めて感じたし、岩手県のよさ、伝統芸能をはじめ、農林水産業やこういった景観をつくり出している一次産業の皆さんにも敬意を表したい。そういった方々の取り組みが、子供たちの体験を通じて、全世代で共有できるといいなと思った。

本日頂戴した御意見や御提言については県議会の全議員で共有し、今後の議員活動に生かしてまいりたい。これからも県議会に対する御意見や御提言があれば、地元の県議会議員あるいは県議会事務局までお寄せいただきたいと思う。今後とも、ぜひ交流を深めていっていただければと思う。

お忙しいところ御参加いただいたことに感謝を申し上げ、意見交換会を終了させていただく。